

4 敷地造成工事

(1) 敷地造成工

指定地内を横断する旧村道阿部山6号線は、墳丘の西側では急勾配で丘陵を削り込んでおり、しばしば崩落を起こしていた。敷地造成は、この部分を埋めて墳丘の立地する尾根が南西に張り出す形状を再現することにより、丘陵の南斜面に立地する終末期古墳の特徴を顕在化できるものとして工事を実施した。このため尾根の南側で、墳丘周辺から西側では全体に盛土を行うこととなった。

周辺地形の丘陵部と平坦部の境界付近を観察すると、農地開発が丘陵部に迫った結果かは明らかではないが、平坦部近くで急斜面になっているところが少なくない。このため南西に張り出す尾根を再現した部分では園路沿いをやや急勾配にし(等高線を園路側に寄せて)、むくれるような地形とすることも考えられた。しかしながら、失われた地形の確実な根拠もなく、盛土厚を増やすことに伴う崩落の危険性も生じるため、園路北側では盛土量を抑え、墳丘の向かって反り上がるような地形とした。

園路は指定地内東側では旧村道の位置を踏襲し、西側では復元した尾根の中腹を巡るルートとし、公園側の園路と接続させ、墳丘前から谷地内の古墳観賞広場等を周遊できるようにした。このため一部切土造成を実施することとなった。西側の公園園路との接道のため園路設置部分については、園路勾配が旧村道勾配約13%よりも急にならないよう最大勾配を12%とした。

造成切土 84 m^3

造成盛土 $3,845\text{ m}^3$

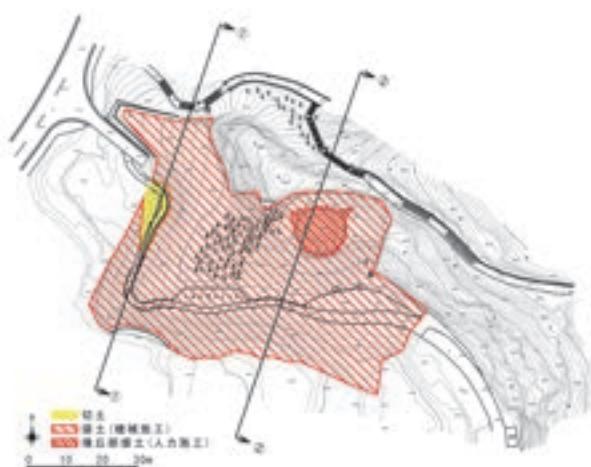


Fig.78 造成平面図

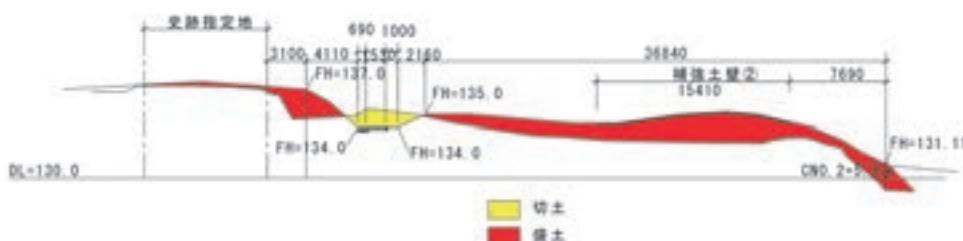


Fig.79 造成断面図①

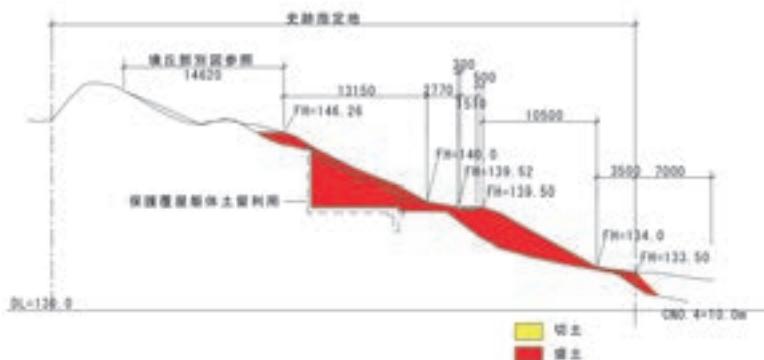


Fig.80 造成断面図②



Fig.81 崩落頻発地（ミラー付近）西から



Fig.82 崩落頻発地（ミラー付近）南から



Fig.83 擁壁付近盛土造成



Fig.84 盛土造成作業



Fig.85 盛土造成作業（南から）



Fig.86 園路地盤完成

(2) 墳丘整備工

整備する墳丘の形状については、復元ではなく、あくまで復旧であり、発掘調査で判明した2段築成という形状や背面カットは表現するというものであった。このため下段部は復元的になる一方で、上段部は保護のための最低限の盛土で覆うためいびつな形となり、降雨時のミズミチの形成など安定性を欠く可能性が考えられた。そこで上段部も復元の形状を意識しつつ、遺構保存のために十分な盛土を施すこととした。上段部裾と下段部裾とは石室中央を中心とした同心円とみなすことができるが、墳頂を同心円の中央に一致させると、テラスが南へ傾斜していると考えられていたため上段部では北側の勾配は緩く、南側の勾配は急になる。そのためバランスの良い形状を考慮し、墳頂を1m程北へ寄せることとした。形状の施工については奈良文化財研究所が指導した。

施工は、遺構を保存していた土のう・不織布の撤去からはじめ、人力盛土造成により工事を実施した。工事期間中、1日の施工終了時には、養生シートで墳丘部を覆い遺構の保護を行った。

墳丘周辺人力盛土 220 m^3

墳丘盛土 42 m^3

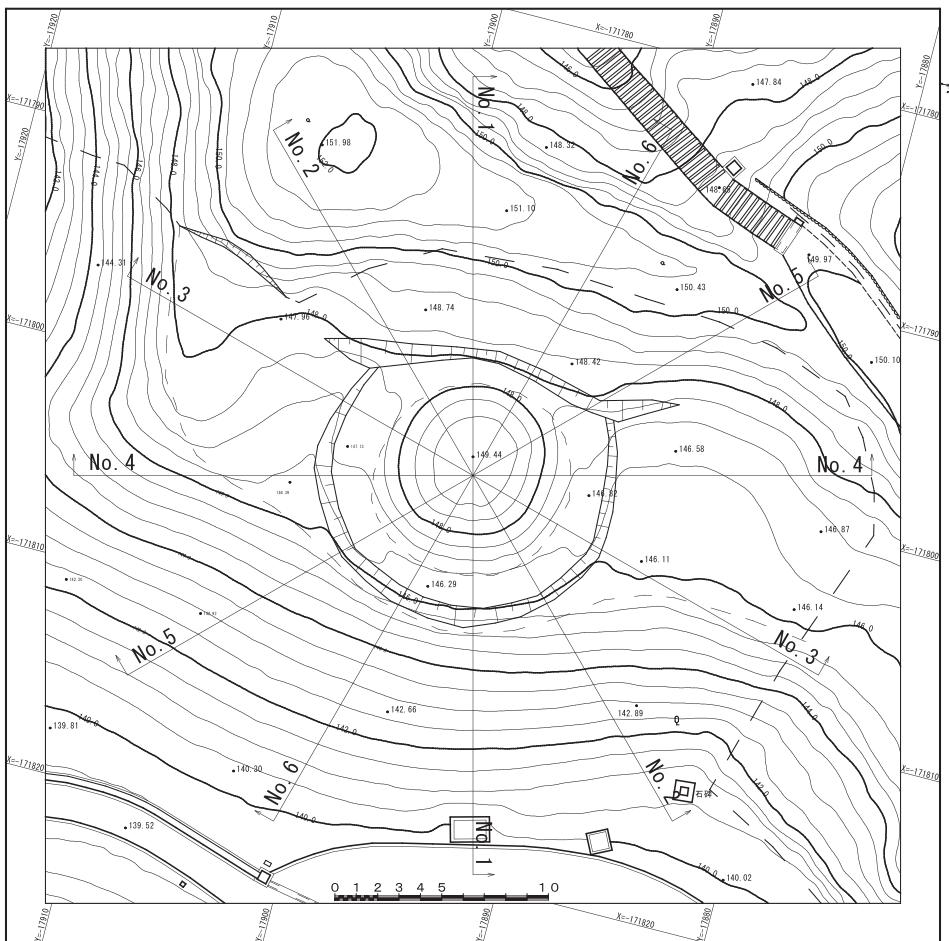


Fig.87 墳丘竣工平面図（地形復元模型作成範囲と一致）および断面位置図

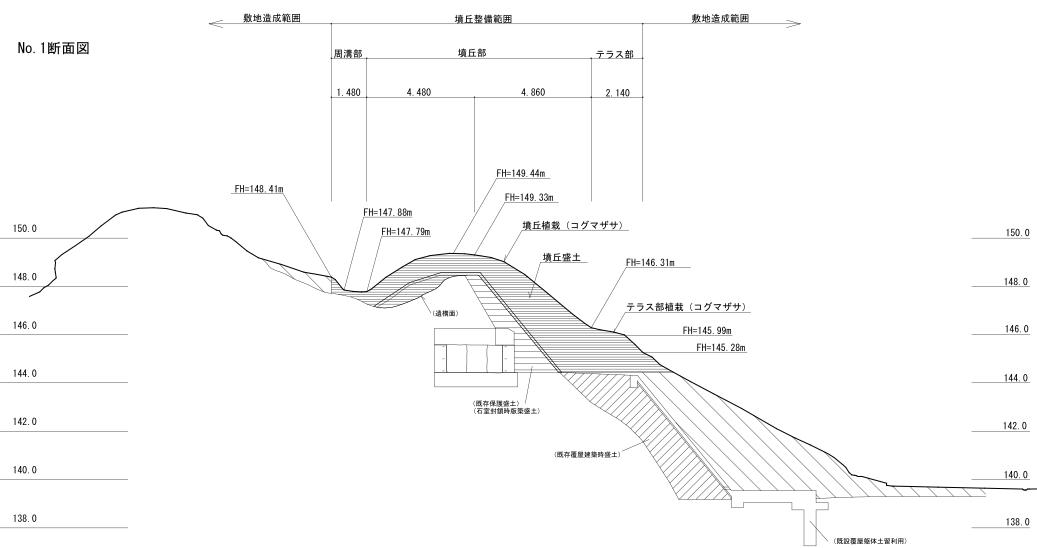


Fig.88 No.1 断面図

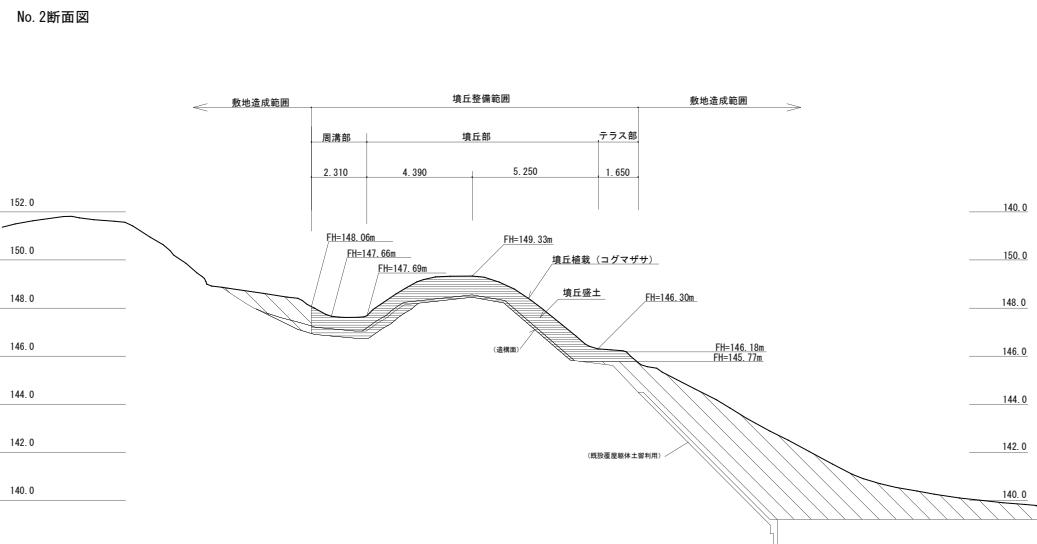


Fig.89 No.2 断面図

No. 3断面図

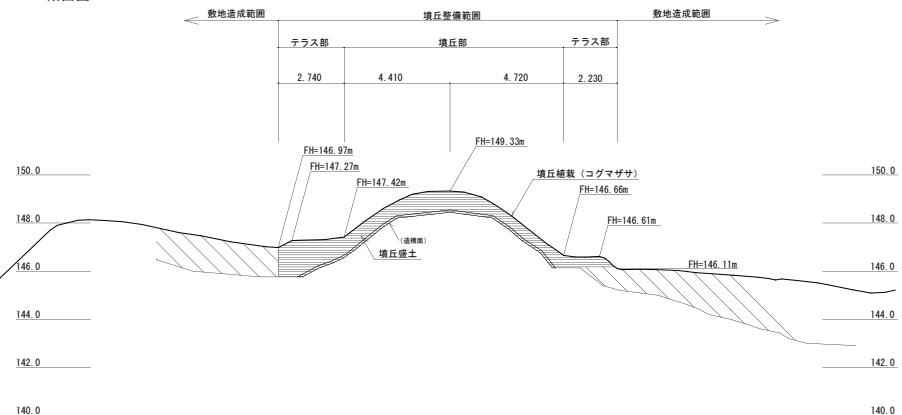


Fig.90 No.3 断面図

No.4断面図

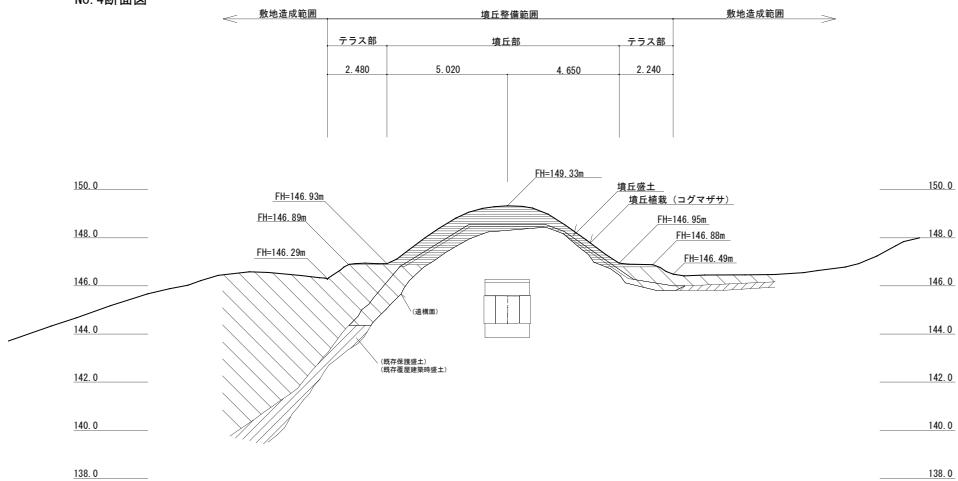


Fig.91 No.4 断面図

No.5断面図

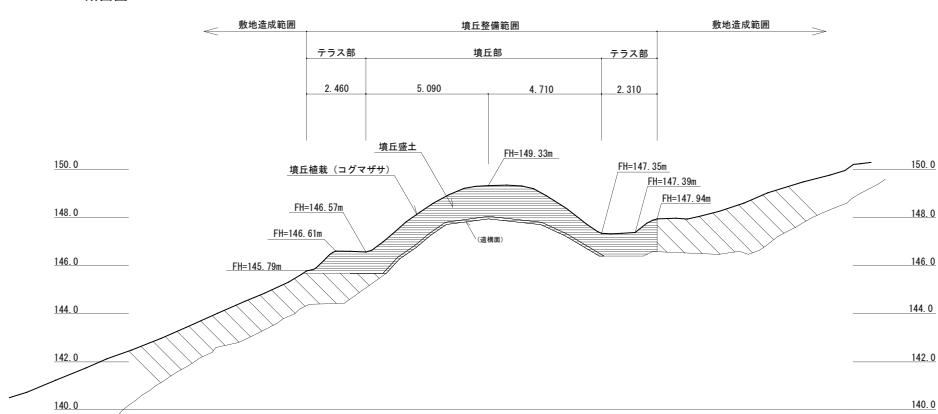


Fig.92 No.5 断面図

No.6断面図

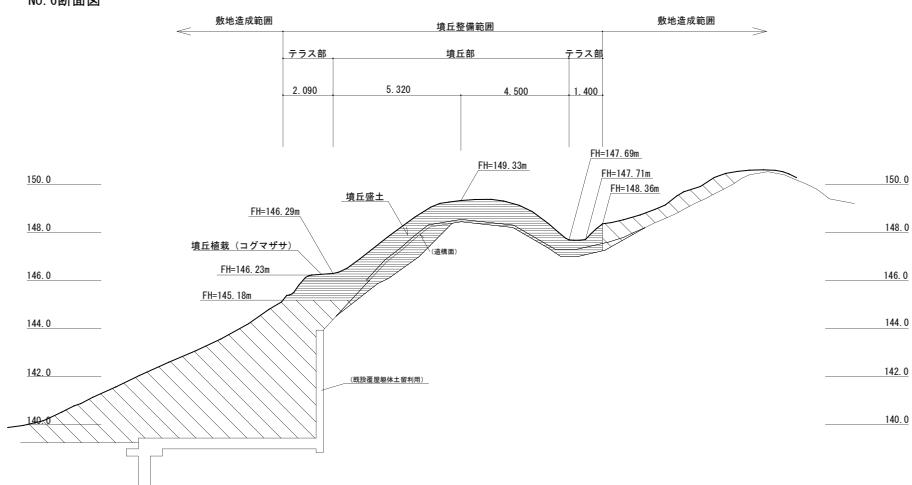


Fig.93 No.6 断面図



Fig.94 土のう撤去状況



Fig.95 土のう・不織布撤去状況



Fig.96 撤去工完了



Fig.97 人力盛土施工



Fig.98 墓丘下段部テラセル設置状況



Fig.99 盛土整形作業



Fig.100 背面カット部の丁張り



Fig.101 奈良文化財研究所による指導